

# 「遊びを通して地域がつながる —こどもの遊び場づくりと地域づくり—」 石巻専修大学における「プレイパーク」の実践について

「石巻専修大学共創研究プロジェクト」プレイパーク事業リーダー  
経営学部 山崎 泰央 准教授

〈インタビュー、文章構成 東日本大震災石巻専修大学報告書第2号編纂ワーキンググループ〉

## 【インタビューの前に】

石巻では、震災後、子ども達の遊び場が不足している。被害のない住宅地でも、多くの公園は仮設住宅用地となり、また小学校の校庭にも仮設校舎が建てられている。このような現状を見て、山崎泰央准教授ははじめゼミの学生たちは震災により遊び場を失った子どもたちのために外遊びの場を提供する必要があると考えた。現在、未就学児から小学生までの子どもたちの自ら育つ力を引き出すために、仮設住宅住民、近隣住民、NPO、大学の4者が協力して、外遊びの場「プレイパーク」を設置・運営している。

—まずプレイパークとはどんなものか教えてください—

プレイパークは、戸外の遊び場が不足している子どもたちのために、自由に自らの想像力を生かして遊ぶことのできる外遊びの場を提供しようという試み。日本では1979年東京世田谷区の「羽根木プレイパーク」から始まった。地域の空き地などを使い、遊具等を用意して、子どもたちに自主的に遊んでもらう。遊びを通じて子どもたちの主体性や健康を育む。それを危険がないように「プレイリーダー」が見守る、という活動。

—この取り組みをはじめた経緯は—

山崎ゼミでは震災後、仮設団地の調査を通じて、子ども達の遊び場が不足していることを痛感した。ゼミの復興支援活動として、学生たちが集会所で子ども達の遊び相手をしていたが、サッカーやドッジボールなどをするため、結局いつも外に出て遊ぶことになる。そうすると駐車場で遊ばせるしかない。それは危険なので、学生の中にはこれではいけないという問題意識があって、どうしたらいいだろうと考えていた時、“やっぺす石巻※”の兼子佳恵代表・渡部慶太事務局長と出会い、プレイパークの話聞いて、石巻専修大学の敷地でも実施しようという話になった。

※石巻復興支援ネットワーク(通称:やっぺす石巻)代表:兼子佳恵さん

—どのように実施しているのですか—

石巻専修大学と石巻復興支援ネットワークとの共催で、開成・南境地区の仮設団地の近くの空き地(通称:やっぺす広場)と石巻専修大学の運動場で、毎月1~2回開催している。子どもたちは「自分の責任で自由に遊ぶ」をモットーに、ボール遊びやバトミントン、かけっこをしたり、段ボールで基地を作ったり、焚き火でパンを作ったりなど、様々な遊びを楽しんでいる。大学でのプレイ

パークの運営は山崎ゼミの学生たちが担当し、子どもたちと一緒に遊ぶことで、学生自身の企画力や運営力の向上にもつながっている。

初回はTBC夏祭りにぶつけて、スイカ割りをした。父母なども含め100名ほどの参加者があった。その後の開始日にも20人~100人の子どもたちが集まり、朝10時からお昼を挟んで3時頃まで実施している。

### 〈やっぺす石巻のプレイパーク〉

やっぺす石巻は、被災地で最大級の開成仮設団地の支援をするなかで、震災によって子どもたちの遊び場がなくなったことを実感し、こどもたちの遊び場を確保するだけでなく、地域のこどもたちが集まるような仕掛けを作ろうと考えた。そこで、開成近くの空き地を確保し、石ころや鉄のくい、ボルトなどを取り除き、多くの人の協力により徐々に“やっぺす広場”が整備されていった。近隣の小学校にもチラシを配って参加を呼びかけ、周辺の仮設住まいの子どもだけでなく、離れた校区の子どもたちもプレイパークを訪れている。

—学生は具体的にどのような活動をしているのですか—

学生達は、最初は「プレイパーク」と聞いてハードルが高そうな気がしていたようだが、“やっぺす広場”や石巻市民会議主催の牧山プレイパークに参加し、大人が遊ばせるのではなく、こどもが自発的に遊ぶのを大人が見守る、あるいは一緒に遊ぶ、ということでもいいのだとわかったようだ。「にじいろクレヨン」でもお手伝いしている四年生の佐藤夏実さん（「在学生の活動紹介」P128~P131参照）が子ども支援のノウハウを持っていたので、彼女が中心になって大学でのプレイパークを運営することになった。

南境の広場には据え付けの遊具もあるが、大学の敷地には固定式の遊具を置くことができないので、学生達が体育の講義等で使う道具などを持ち寄り、遊び方

を考えながら、彼らのできる範囲で実施している。大学の運動場は火が使えないのが残念だが、それを補ってもあまりある広さなので、いくらボールを投げても道路に出してしまうことがなく、綱引きでも駆けっこでも好きなだけできる。遊具は豊富ではないが、学生たちは遊び方を工夫し、子どもたちと一緒に楽しそうに活動している。ただ、学生が子ども達の遊びをあまり指導するとうまくいかない。プレイパークは子どもの自由な・自己責任による遊びが基本だから。けんかをはじめても基本は様子見。すぐに介入することはしない。彼ら自身で解決するのを待つ。

冬場の石巻は寒くて、風が強いので、外遊びは向かないが、大学には広い体育館があるので利用している。子どもも親も屋内で安心して遊ぶことができるので、12月のクリスマス会には100名以上の子どもが集まってきた。

—大学の運動場に遊びに来るのは仮設住まいの子どもたちが多いのですか—

震災により沿岸部全域で遊び場が不足しているので、仮設の子どもに限らず、周辺の自宅住まいの子ども達も来る。また石巻全域の小学校にチラシを配布しているので、離れた地区から車で送迎されて来る子どももいる。最初は保護者に伴われていたが、近所の子などは子どもたちだけで誘い合って来ている。

—学生と子ども達の間関係はどうですか—

学生たちも子ども目線になって楽しんでいる。何人かの子もたちが特定の学生になつて、その学生を独り占めしようとしたりする。仮設から来る子どもの中には、暴力をふるうなど、問題を抱えた子どもたちもいるようだ。問題を抱えた子どもたちへの対応は学生達も苦労している。最近では、常連の子どもたちが受付などを手伝ってくれるようになった。子どもたちも、誰かの役に立ちたいと思うようになったのだろう。学生と一緒に子どもたちも成長しているのだと思う。

1 大学の動き  
平成23年4月

2 震災に関する  
研究活動

3 大学施設の地域  
催事への提供

4 震災の影響に関する  
全学調査結果

5 防災・減災のための  
備蓄品調達状況

6 震災に関する  
取り組み  
—インタビューによる紹介—

7 震災2年目における  
委員会等の活動と  
本学の対応

8 阪神・東海に学ぶ

9 学内に結成された  
サークルの活動

## 震災に関する取り組みーインタビューによる紹介ー

ー最後に今後の展望を聞かせくださいー

子どもの遊び場が地域に根付けばいいと思う。今後は地域の高校生に協力をしてもらって、企画・運営を手伝ってもらいたい。ここ1~2回は“やっぺす石巻”からの紹介でジュニアリーダーやボランティアに興味のある高校生が手伝いに来てくれている。もっと高校生たちが関与する場面を増やしていきたい。さらに、新設される人間学部の教育系の学生たちにも期待している。

